

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2015-210000

(P2015-210000A)

(43) 公開日 平成27年11月24日(2015.11.24)

(51) Int.Cl.	F 1	テーマコード (参考)
F 2 4 C 15/00 (2006.01)	F 2 4 C 15/00	3 B 1 0 2
A 4 7 G 9/02 (2006.01)	A 4 7 G 9/02	U

審査請求 未請求 請求項の数 6 O L (全 12 頁)

(21) 出願番号	特願2014-90549 (P2014-90549)	(71) 出願人	514103084 大綿株式会社 愛知県名古屋市中区金山1丁目8番20号 シャローナビル4F
(22) 出願日	平成26年4月24日(2014.4.24)	(74) 代理人	100094190 弁理士 小島 清路
		(74) 代理人	100151644 弁理士 平岩 康幸
		(74) 代理人	100151127 弁理士 鈴木 勝雅
		(72) 発明者	森島 豊裕 愛知県名古屋市中区金山1丁目8番20号 シャローナビル4F 大綿株式会社内
		Fターム(参考)	3B102 BA03 BA04 BA12

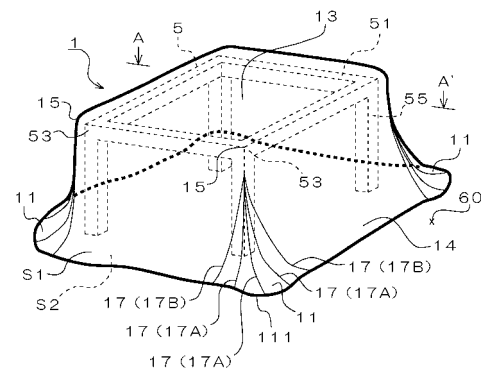
(54) 【発明の名称】 こたつ掛布団

(57) 【要約】

【課題】四隅にまで中綿を有して高い保温性を確保しながら浮き上がりを防止したこたつ掛布団を提供する。更に、製造効率よく、製造ロットを従来に比べて自由にコントロールし易く、尚且つ、端材量を軽減できるこたつ掛布団を提供する。

【解決手段】天面51が四角形にされた櫓5に被せて天面からはみ出た布団の周辺部14を櫓5から垂下して利用するこたつ掛布団1である。また、四隅が弧状に丸められた略四角形をなし、全面に中綿を有する布団から形成されており、各々の四隅11には、少なくとも1本の縫製ライン17が配されている。更に、縫製ライン17は、弧状をなす縁部111から、櫓5の天面51の角53が当接される位置15に向かって、その間の一部又は全長を縫製してなる縫製ライン17である。

【選択図】図1



【特許請求の範囲】**【請求項 1】**

天面が四角形にされた櫓に被せて前記天面からはみ出た布団の周辺部を前記櫓から垂下して利用することたつ掛布団であって、

四隅が弧状に丸められた略四角形をなし、全面に中綿を有する布団から形成されており、

各々の前記四隅には、少なくとも 1 本の縫製ラインが配されており、

前記縫製ラインは、前記弧状をなす縁部から、前記櫓の前記天面の角が当接される位置に向かって、その間の一部又は全長を縫製してなる縫製ラインであることを特徴とするこたつ掛布団。

10

【請求項 2】

継ぎの無いひと続きの布団である請求項 1 に記載のこたつ掛布団。

【請求項 3】

前記四隅の形状に対応した切欠を有した本体部に、前記四隅を継ぎ足して形成されている請求項 1 に記載のこたつ掛布団。

【請求項 4】

前記縫製ラインは、前記四隅を 2 ～ 4 つの弧状に略等分する縫製ラインを含む請求項 1 乃至 3 のうちのいずれかに記載のこたつ掛布団。

【請求項 5】

前記縫製ラインは、前記櫓の前記天面をなす各辺を延長した方向の縫製ラインを含む請求項 1 乃至 4 のうちのいずれかに記載のこたつ掛布団。

20

【請求項 6】

前記縫製ラインを形成する縫糸は、本こたつ掛布団の表裏の側生地を貫通して前記中綿を縫い止めている請求項 1 乃至 5 のうちのいずれかに記載のこたつ掛布団。

【発明の詳細な説明】**【技術分野】****【0001】**

本発明は、こたつ掛布団に関する。更に詳しくは、四角い櫓に被せて天面からはみ出た布団の周辺部を櫓から垂下して利用することたつ掛布団に関する。

【背景技術】

30

【0002】

近年、都市部のマンション等、比較的狭いスペースにおいてもスマートな住空間を実現しやすいように工夫された省スペースこたつが多く利用されている。この省スペースこたつには、従来に比べて布団全体の中綿量が低減され、嵩高さが抑えられた掛布団が利用される。更に、このこたつ布団は、中綿量の低減とともに、布団の四隅が中綿ごと切り取られ、その切欠部にフリース等の薄布が縫合された形態とされている。そのため、四隅の嵩高さも抑えられており、全体として優れた省スペース性の実現されている。そして、このこたつ掛布団は、その薄布が縫合された形態から、四隅の形状の自由度が高く、櫓の脚に沿って垂下され易い構造となっている。このようなこたつ掛布団としては、下記特許文献 1 - 5 が知られている。

40

【先行技術文献】**【特許文献】****【0003】**

【特許文献 1】特開平 1 1 - 2 8 7 4 6 1 号公報

【特許文献 2】実開昭 6 3 - 2 6 0 0 9 号公報

【特許文献 3】特開平 6 - 9 4 2 4 6 号公報

【特許文献 4】登録実用新案第 3 0 6 3 5 7 2 号公報

【特許文献 5】特開 2 0 0 2 - 1 0 2 0 3 6 号公報

【発明の概要】**【発明が解決しようとする課題】**

50

【 0 0 0 4 】

上記特許文献 1 - 5 のこたつ掛布団は、上述のように、薄布が縫合された形態であることから、櫓の脚に沿って垂下され易く、隙間が形成されることを抑えて高い保温性が得られる。しかしながら、依然として十分な暖かさを提供し得るものではないことが利用者らの声から分かってきている。即ち、四隅に縫合された布が薄布であるために、中綿が充填された他部に比べて保温性が劣り、利用者は相対的に保温性の低い薄布の部分から冷気を敏感に感じ取ってしまうことが分かった。また、櫓から垂下される布団の周辺部（フラップ状の部分）が、使用時に互いに巧く合わさるとも限らず、特許文献 1 の図 1、特許文献 2 の図 1、特許文献 3 の図 1、特許文献 4 の図 4、特許文献 5 の図 1 等 に示されている通り、櫓から垂下された布団の隙間から薄布が露出してしまう場合もある。このような場合にも同様に利用者は冷気を感じるようになってしまう。これらの観点から、省スペース性を十分に維持しながらより高い保温性が得られるこたつ布団が求められる。

10

【 0 0 0 5 】

本発明は、上記課題に鑑みてなされたものであり、省スペース性と高い保温性とを両立できるこたつ掛布団を提供することを目的とする。更に、製造効率よく、製造ロットを従来に比べてコントロールし易く、尚且つ、端材量を軽減できるこたつ掛布団を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【 0 0 0 6 】

本発明は以下の通りである。

20

請求項 1 のこたつ掛布団は、天面が四角形にされた櫓に被せて前記天面からはみ出た布団の周辺部を前記櫓から垂下して利用するこたつ掛布団であって、

四隅が弧状に丸められた略四角形をなし、全面に中綿を有する布団から形成されており、

各々の前記四隅には、少なくとも 1 本の縫製ラインが配されており、

前記縫製ラインは、前記弧状をなす縁部から、前記櫓の前記天面の角が当接される位置に向かって、その間の一部又は全長を縫製してなる縫製ラインであることを要旨とする。

請求項 2 のこたつ掛布団は、請求項 1 のこたつ掛布団において、継ぎの無いひと続きの布団であることを要旨とする。

請求項 3 のこたつ掛布団は、請求項 1 のこたつ掛布団において、前記四隅の形状に対応した切欠を有した本体部に、前記四隅を継ぎ足して形成されていることを要旨とする。

30

請求項 4 のこたつ掛布団は、請求項 1 乃至 3 のうちのいずれかに記載のこたつ掛布団において、前記縫製ラインは、前記四隅を 2 ～ 4 つの弧状に略等分する縫製ラインを含むことを要旨とする。

請求項 5 のこたつ掛布団は、請求項 1 乃至 4 のうちのいずれかに記載のこたつ掛布団において、前記縫製ラインは、前記櫓の前記天面をなす各辺を延長した方向の縫製ラインを含むことを要旨とする。

請求項 6 のこたつ掛布団は、請求項 1 乃至 5 のうちのいずれかに記載のこたつ掛布団において、前記縫製ラインを形成する縫系は、本こたつ掛布団の表裏の側生地を貫通して前記中綿を縫い止めていることを要旨とする。

40

【発明の効果】

【 0 0 0 7 】

本こたつ掛布団は、四隅が弧状に丸められた略四角形をなし、全面に中綿を有する布団から形成されている。また、本こたつ掛布団は、弧状に丸められた各々の四隅に少なくとも 1 本の縫製ラインが配され、その縫製ラインは、弧状をなす縁部から、櫓の天面の角が当接される位置に向かって、その間の一部又は全長を縫製してなる縫製ラインを有する。

即ち、四隅にまで中綿が配されていることで、本こたつ掛布団は四隅においても他部と差異のない均質な保温性を確保できる。そのため、利用者に高い保温性を実感させることができる。そして、四隅の縁から櫓の天面の角へと伸びた縫製ラインによって、この縫製ラインに沿って形状が強制され、布団の四隅を櫓の脚に沿ってなだらかにカーブさせなが

50

ら床面へと垂下できる。また、垂下された四隅は弧状であるため床面に密着され易く布団の浮き上がりを防止できる。また、四隅が弧状に切り欠かれているために十分な省スペースも確保できる。

また、請求項 2 に示すように、継ぎの無いひと続きの布団から形成されている場合には、別材を四隅に縫合する必要がないため、製造工数を抑えて効率よく製造できる。また、薄布等の別材を利用する必要がないため、別材の原料量に影響されずに製造ロットをコントロールできる。更に、その四隅は弧状に切り欠くだけでよいため、原材料から切り欠く部位を従来に比べて小さく抑えて端材量を軽減できる。

【0008】

更に、請求項 4 に示すように、本こたつ掛布団の有する縫製ラインが、四隅を 2 ～ 4 つの弧状に略等分する縫製ラインを含む場合には、櫓から布団が垂下される方向を、天面の対角延長線上において外側へ広がるように強制することができ、四隅をより確実に床面に密着させて布団の浮き上がりを防止できる。

また、請求項 5 に示すように、本こたつ掛布団の有する縫製ラインが、櫓の天面をなす各辺を延長した方向の縫製ラインを含む場合には、櫓から布団が垂下される方向を、天面を構成する辺に沿って外側へ広がるように強制できる。そのため、四隅以外の部分をより確実に床面に密着させて布団の浮き上がりを防止できる。

請求項 6 に示すように、本こたつ掛布団において、縫製ラインを形成する縫系が、こたつ掛布団の表裏の側生地を貫通して中綿を縫い止めている場合には、表裏に貫通されていない場合に比べて、櫓から布団が垂下される方向をより強く強制できる。そのためより強く垂下方向を制御できる。

【図面の簡単な説明】

【0009】

【図 1】本こたつ掛布団の一例を説明する透過斜視図である。

【図 2】図 1 における A - A' 断面を説明する断面図である。

【図 3】本こたつ掛布団の平面形態を説明する平面図である。

【図 4】本こたつ掛布団における縫製ライン 17 A を説明する平面図である。

【図 5】本こたつ掛布団における縫製ライン 17 B を説明する平面図である。

【図 6】本こたつ掛布団のバリエーション（実施の形態 1）を説明する平面図である。

【図 7】本こたつ掛布団のバリエーション（実施の形態 2）を説明する平面図である。

【図 8】本こたつ掛布団における他の縫製ライン 19 A を説明する平面図である。

【図 9】本こたつ掛布団における他の縫製ライン 19 B を説明する平面図である。

【図 10】本こたつ掛布団の他例を説明する透過斜視図である。

【図 11】本こたつ掛布団のバリエーションであって、四隅を継ぎ足して形成した形態を説明する説明図である。

【発明を実施するための形態】

【0010】

以下、本発明を、図を参照しながら説明する。

本発明のこたつ掛布団 1（図 1 - 図 11 参照）は、天面 51 が四角形にされた櫓 5 に被せて、天面 51 からみ出た布団の周辺部 14 を櫓 30 から垂下して利用するこたつ掛布団である。そして、このこたつ掛布団 1 は、四隅 11 が弧状に丸められた略四角形をなしており、全面に中綿 23 を有する継ぎの無いひと続きの布団から形成されている。

【0011】

即ち、本こたつ掛布団 1 を広げて得られる平面形状は、四隅 11 が弧状に丸められた略四角形をなしている（図 3 参照）。四角形の形状としては、具体的には、正方形及び長方形等があげられる。この略四角形をなすこたつ掛布団 1 では、その中央部 13 が櫓 5 の天面 51 上に配置される（図 1 参照）。また、この中央部 13 を取り囲んで位置された周辺部 14 は、こたつ掛布団 1 を櫓 5 に被せた際に天面 51 上からはみ出して櫓 5 から床面 60 へと垂下される（図 1 及び図 2 参照）。通常、周辺部 14 は、櫓の脚 55 の長さより長く形成され、櫓の脚 55 の長さより長くされた一部（周辺部の外周部分 14a）は床面 6

10

20

30

40

50

0 上を覆うように、床面 6 0 と略並行に配置される部位（図 2 参照）となる。

【 0 0 1 2 】

また、本こたつ掛布団 1 は、通常、少なくとも、表裏各々に 1 層以上の側生地 2 1 を有する（図 2 参照）。即ち、表側に少なくとも 1 層の表側地 2 1 1 を有し、更に、裏側に少なくとも 1 層の裏側地 2 1 2 を有する。表裏の側生地 2 1 は、各々 1 層のみ有してもよく 2 層以上を有してもよい。また、表裏の側生地 2 1 は、表裏で同じ層数を有してもよいし、表裏で異なる層数を有してもよい。

各側生地 2 1 を構成する繊維等は特に限定されず、合成繊維（ポリエステル繊維、アクリル繊維、アクリレート系繊維、ナイロン繊維等）、天然繊維（綿、シルク、獣毛繊維等）及び再生繊維（再生ポリエステル繊維等）などを適宜利用できる。これらは 1 種のみを用いてもよく 2 種以上を併用してもよい。また、表裏で同じ繊維を用いてもよく異なる繊維を用いてもよい。更に、生地種も特に限定されず、各種の織布及び不織布等を利用できる。生地種は表裏で同じであってもよく異なってもよい。異なる生地を用いる場合としては、例えば、表側地 2 1 1 に表面が滑らかな生地を用い、裏側地 2 1 2 にパイル生地や起毛生地を用いる場合が挙げられる。また、これらの表側地 2 1 1 と裏側地 2 1 2 とは、通常、その縁で閉じられている。閉じられた縁には覆地を被せてヘムとすることができる。

【 0 0 1 3 】

また、本こたつ掛布団 1 は、その全面に中綿 2 3 を有する布団から形成されている。即ち、四隅 1 1 にまで中綿 2 3 が充填されているため、布団の四隅 1 1 においても他部と差異のない保温性を発揮でき、布団全面において均質な保温性を発揮できる。更に、本こたつ掛布団 1 は、その全面に中綿 2 3 を有するとともに、四隅 1 1 の形状に対応した切欠を有した本体部 7 0 に、四隅 1 1 を継ぎ足して形成した形態（図 1 1 参照）とすることができる。また、継ぎの無いひと続きの布団から形成した形態（図 1 - 図 1 0 参照）とすることができる。これらのうちでは、継ぎの無いひと続きの布団から形成されていることが好ましい。

こたつ掛布団 1 は中綿 2 3 をどのように有してもよいが、通常、前述の表側地 2 1 1 と裏側地 2 1 2 との間に、中綿 2 3 からなる中綿層として層状に配置される（図 2 参照）。中綿 2 3 を構成する繊維等は特に限定されず、合成繊維（ポリエステル繊維、アクリル繊維、アクリレート系繊維、ナイロン繊維等）、天然繊維（綿、シルク、獣毛繊維等）及び再生繊維（キュプラ、再生ポリエステル繊維等）などを適宜利用できる。これらは 1 種のみを用いてもよく 2 種以上を併用してもよい。更に、これらの中綿用の繊維は、上述の各種繊維に対して摩擦低減処理がなされたものを利用できる。また、中綿 2 3 の形態も特に限定されず、綿状の繊維塊を利用してもよく、ウェット状の不織布やその積層物を利用してもよく、これらを組み合わせて利用してもよい。更に、中綿 2 3 は、本こたつ掛布団 1 内において、1 層に配置されていてもよく、2 層以上にわたって分割して配置されてもよい。即ち、例えば、表側地 2 1 1 と中生地との間に第 1 中綿層を配し、裏側地 2 1 2 と中生地との間に第 2 中綿層を配することができる。

【 0 0 1 4 】

本こたつ掛布団 1 に含まれる中綿量は特に限定されないが、通常、 500 g/m^2 以下である。単位面積あたりの中綿量が上記範囲では、省スペースこたつ用のこたつ掛布団として特に適している。また特に、縫製ライン 1 7 によって布団の四隅 1 1 を強制し易く、布団の四隅 1 1 を櫓の脚 5 5 に沿ってなだらかにカーブさせながら床面 6 0 へと垂下できる。中綿量は、更に、 $50 \sim 400\text{ g/m}^2$ とすることができ、特に $100 \sim 350\text{ g/m}^2$ とすることができる。尚、上記中綿量は、本こたつ掛布団 1 全体に含まれる中綿 2 3 の全質量を測定し、その全質量を本こたつ掛布団 1 全体の平面積（側生地の平面積）で除した値として得ることができる。

【 0 0 1 5 】

更に、本こたつ掛布団 1 の四隅 1 1 は弧状に丸められている。四隅 1 1 が弧状であり、四隅の各々の縁部が弧状となるように切り欠かれており、省スペース化を達することができる。そして、垂下された四隅 1 1 は図 1 に示すように床面 6 0 に綺麗に密着して布団の

浮き上がりが防止される。縁部 1 1 1 をなす弧の中心及び大きさは特に限定されない。

例えば、櫓 5 の天面 5 1 を構成する四角形の対角線 L (四角形の四隅が直角であると仮定した場合の仮想対角線) を規定した場合、対角線 L 上のあらゆる点を弧の中心とすることができる。具体的には、図 4 の隅 1 1 a は、天面の角が当接される位置 1 5 a を中心とする弧 (1 / 4 円弧) によって形成された例を示している。また、図 4 の隅 1 1 b は、天面の角が当接される位置 1 5 と角 L_0 (四角形の四隅が直角であると仮定した場合の仮想角 L_0) との距離を二等分する点 P_1 を中心とする弧 (1 / 4 円弧) によって形成された例を示している。更に、図 4 の隅 1 1 c は、対角線 L が交わる交点 L_1 と角 L_0 (四角形の四隅が直角であると仮定した場合の仮想角 L_0) との距離を三等分する点のうち、 L_1 寄りの点 P_2 を中心とする弧 (1 / 4 円弧) によって形成された例を示している。また、各弧の中心角 θ は限定されず、図 4 ではいずれも 90 度で示しているが、 $0 < \theta < 90$ の範囲とすることができる。

【0016】

また、本こたつ掛布団 1 では、四隅 1 1 の各々には少なくとも 1 本の縫製ライン 1 7 が配されている。この縫製ライン 1 7 は、縫製によって形成された縫目であり、表側地 2 1 1 の表面に現れるように形成されている (図 2 参照)。この縫製ライン 1 7 を有することで、縫製ライン 1 7 に沿って本こたつ掛布団 1 の形状を強制することができる。このため、布団の四隅 1 1 を櫓の脚 5 5 に沿ってなだらかにカーブさせながら床面 6 0 へと垂下させることができる。

更に、縫製ライン 1 7 は、弧状をなす縁部 1 1 1 から、布団の裏面側 S 2 において櫓 5 の天面 5 1 の角 5 3 が当接される位置 1 5 に向かって、その間の一部又は全長を縫製してなる縫製ライン 1 7 である (図 1 及び図 2 参照)。但し、縫製ライン 1 7 は、実際に縫製時に、縁部 1 1 1 側を始点として位置 1 5 の方向へ向かって縫製されたか否かを問わない。当然ながら、縫製ライン 1 7 は、布団の裏面側 S 2 において櫓 5 の天面 5 1 の角 5 3 が当接される位置 1 5 (位置 1 5 は表面側に配置されている) から、弧状をなす縁部 1 1 1 へ向かって、その間の一部又は全長を縫製してなる縫製ライン 1 7 を含むものである。

【0017】

また、縫製ライン 1 7 は、直線状であってもよく非直線状であってもよいが、直線状であることが好ましい。直線状であることにより、その他の形状である場合に比べて高い強制力を付与できる。そのため、より綺麗に布団の四隅 1 1 を櫓の脚 5 5 に沿ってカーブさせながら垂下させることができる。また、縫製ライン 1 7 が直線状である場合には、ひと続きの 1 本の直線であってもよく断続された線であってもよいが、ひと続きの 1 本の直線であることが好ましい。ひと続きの 1 本の直線である方が、断続された線である場合に比べて高い強制力を付与できる。そのため、より綺麗に布団の四隅 1 1 を櫓の脚 5 5 に沿ってカーブさせながら垂下させることができる。尚、非直線状である場合としては、ジグザグ形状、蛇行形状、つづら折れ形状等が挙げられる。

更に、縫製ライン 1 7 は、通常、少なくとも表側地 2 1 1 に対して中綿層 (中綿 2 3) を縫い止めることによって形成されている。具体的には、例えば、中綿層 (中綿 2 3) の厚みの一部のみを縫系で引掛けのように縫い取って表側地 2 1 1 に中綿層 (中綿 2 3) を縫付けた形態であってもよい。また、中綿層 (中綿 2 3) を貫通した縫系によって中綿層 (中綿 2 3) の全厚みを締め付けた状態で表側地 2 1 1 に中綿層 (中綿 2 3) を縫付けた形態であってもよい。これらのうちでは後者が好ましい。後者の縫製形態では、四隅 1 1 の中綿 2 3 による嵩高さを抑えながら、高い強制力を付与できる。そのため、省スペース性を維持しつつ、より綺麗に布団の四隅 1 1 を櫓の脚 5 5 に沿ってカーブさせながら垂下させることができる。

【0018】

この縫製ライン 1 7 は、表側地 2 1 1 の表面 S 1 (こたつ掛布団の表面 S 1) にのみ現れるように縫製してもよい。即ち、縫製ライン 1 7 がこたつ掛布団 1 の裏面 S 2 に現れないように縫製してもよい。一方、裏側地 2 1 2 の表面 (こたつ掛布団の裏面 S 2) にも現れるように縫製してもよい。即ち、縫製ライン 1 7 を形成する縫系が、本こたつ掛布団 1

10

20

30

40

50

の表裏の側生地 2 1 を貫通して中綿 2 3 を縫い止めた構造とすることができる。この際には、表裏の側生地 2 1 は、これらの間に中綿層（中綿 2 3）を挿んで緩く縫製されてもよいが、表裏の側生地 2 1 は、これらの間に中綿層（中綿 2 3）を挿んできつく縫製される方が好ましい。即ち、表側地 2 1 1 と裏側地 2 1 2 とで中綿層（中綿 2 3）を挟み、中綿層（中綿 2 3）の厚みを締め潰すように縫製されることが好ましい。後者は前者に比べて、四隅 1 1 における中綿 2 3 の嵩高さを抑えてより効果的に省スペース化を実現できる。更に、きつく縫製されることで、高い強制力を付与できる。そのため、布団の四隅 1 1 をより綺麗に櫓の脚 5 5 に沿ってカーブさせながら垂下させることができる。

【0019】

また、縫製ライン 1 7 は、1 つの隅に対して 1 本のみ備えてもよく、1 つの隅に対して 2 本以上を備えてもよい。1 つの隅に対して形成される縫製ライン 1 7 の本数は多い方が、中綿 2 3 による嵩高さをより抑えつつ、より高い強制力を付与できる。しかしながら、必要以上に多いと製造工数が増えるとともに、見栄えに影響することとなる。このような観点から、1 つの隅に形成する縫製ラインは、1 ~ 20 本が好ましく、1 ~ 10 本がより好ましく、1 ~ 7 本が更に好ましく、1 ~ 5 本が特に好ましく、2 ~ 4 本がとりわけ好ましい。

【0020】

また、前述のように、縫製ライン 1 7 は、縁部 1 1 1 から位置 1 5 に向かって、その間の一部又は全長を縫製してなればよいが、なかでも、四隅 1 1 を 2 ~ 4 つの弧状に略等分する縫製ライン 1 7（図 3 - 図 4、図 6 - 9 及び図 1 1 参照）を含むことが好ましい。具体的には、四隅 1 1 を 4 つの弧状に略四等分する縫製ライン 1 7 A（図 3 参照）、四隅 1 1 を 3 つの弧状に略四等分する縫製ライン 1 7 C（図 4 の 1 1 a - 1 1 c 及び図 6 の参照）、四隅 1 1 を 2 つの弧状に略二等分する縫製ライン 1 7 D（図 4 の 1 1 d、図 7 - 9 及び図 1 1 参照）等の縫製ライン 1 7 が挙げられる。これらの縫製ライン 1 7 を有する場合には、櫓 5 から布団が垂下される方向を、天面 5 1 の対角延長線上に外へ広がるように強制でき、弧状に丸められた四隅 1 1 をより確実に床面 6 0 に密着させて、布団の浮き上がりを防止できる。

【0021】

更に、縫製ライン 1 7 は、櫓 5 の天面 5 1 をなす各辺を延長した方向の縫製ライン 1 7 B を含むことが好ましい（図 3 及び図 5 - 9 参照）。このような縫製ライン 1 7 B を有する場合には、櫓 5 から布団が垂下される方向を、天面 5 1 を構成する辺に沿って外へ広がるように強制できる。このため、四隅 1 1 以外の部分もより確実に床面 6 0 に密着させて、布団の浮き上がりを防止できる。

特に、本こたつ掛布団 1 は、上述の縫製ライン 1 7 A、1 7 C 及び 1 7 D のうちのいずれかと、櫓 5 の天面 5 1 をなす各辺を延長した方向の縫製ライン 1 7 B と、の 2 種をともに有する（図 1、図 3、図 6 - 9 参照）ことが好ましい。

【0022】

また、布団の四隅 1 1 に形成された各縫製ライン 1 7 は、櫓 5 の対角同士で連続された形態であってもよい（図 9 参照）。即ち、例えば、布団の 1 つの隅から、布団の中央部 1 3 を通り、布団の対角の隅まで、連続した縫製ラインとすることができる。その他、前述の布団の四隅 1 1 を櫓の脚 5 5 に沿って綺麗に垂下させるための縫製ライン 1 7 以外にも、他の縫製ライン 1 9 を備えることができる。他の縫製ライン 1 9 としては、各所において、中綿 2 3 を側生地 2 1 へ縫い止める縫製ライン 1 9 が上げられる。このような縫製ライン 1 9 としては、例えば、布団の中央部 1 3 に十字形状に縫製された縫製ライン 1 9 A（図 8 参照）や、布団の対角同士を結ぶように縫製された縫製ライン 1 9 B（図 9 参照）等が上げられる。これらは 1 種のみを用いてもよく 2 種以上を併用してもよい。

【0023】

本こたつ掛布団 1 は、前述のように、側生地 2 1 及び中綿 2 3 以外にも他の構成を備えることができる。他の構成としては、断熱シート等の中綿 2 3 以外の保温材が挙げられる。断熱シートとしては、アルミシート及びポリエチレンシート等が挙げられる。これらは

10

20

30

40

50

１種のみを用いてもよく２種以上を併用してもよい。その他、不織布シート（脱臭機能を有する不織布シート等）が挙げられる。

【００２４】

〔実施の形態〕

以下では、本発明を実施の形態によって説明する。尚、各実施の形態に共通する説明は省略する。

〔実施の形態１〕

本実施の形態１のこたつ掛布団１（図１－３参照）は、座卓（椅子を使わず、床面６０に座って利用される机）の天面５１が四角形にされた櫓５に被せて天面５１からはみ出た布団の周辺部１４を櫓から垂下して利用される（図２参照）。平面形状は、四隅１１が弧状に丸められた略正方形をなす（図３参照）。四隅を構成する弧は、櫓５の天面５１を構成する四角形の対角線（四角形の四隅が直角であると仮定した場合の仮想対角線）上の点を中心としている。また、四隅が直角であると仮定した場合の正方形の１辺の長さの１／４の長さを半径とする。更に、中心角は９０度としている。このこたつ掛布団の四隅１１は、このように弧状に切り欠かれているために省スペース性が確保されている。

10

【００２５】

また、このこたつ掛布団１は、全面に中綿２３を有する継ぎの無いひと続きの布団である。即ち、四隅１１にまで中綿２３が配されているとともに、継ぎが無いため布団の場所による保温性の差異がないものとなっている。従って、布団全面において均質な保温性を発揮させることができる。特に、布団の四隅１１には他部と差異のない保温性を発揮させることができる。更に、継ぎの無いひと続きの布団であるため、別材を四隅１１に縫合する必要がなく、製造工数が抑えられており効率よく製造できる。また、薄布等の別材を利用する必要がないため、別材の原料量に影響されずに製造ロットをコントロールできる。更に、その四隅１１は弧状に切り欠くだけでよいため、原材料から切り欠く部位を従来に比べて小さく抑えて端材量を軽減している。

20

【００２６】

このこたつ掛布団１は、具体的には、ポリエステル繊維製の側生地２１をその表裏に１層ずつ有する。即ち、１層の表側地２１１と１層の裏側地２１２とを有する。これらの側生地２１は表裏ともにその表面が滑らかな生地であり、これらの側生地２１はその縁で閉じられ、覆地を被せてヘムとされている。更に、中綿２３は、表側地２１１と裏側地２１２との間に１層に配置されている。そして、中綿２３はポリエステル繊維製の繊維塊として、その繊維塊が複数充填されている。単位面積あたりの中綿量は２００ｇ／ｍ^２である。

30

【００２７】

更に、このこたつ掛布団１の四隅１１には、各々５本の縫製ライン１７が配されている（図３参照）。これらの５本の縫製ライン１７は、いずれも、弧状をなす縁部１１１から、櫓５の天面５１の角が当接される位置１５に向かって、その間の全長を縫製してなる縫製ライン１７である。また、各縫製ライン１７は、いずれもひと続きの１本の直線である。この縫製ライン１７を形成する縫糸は、ポリエステル製の縫糸である。

更に、縫製ライン１７は、縫糸がこたつ掛布団１の表裏の側生地２１を貫通して中綿２３を縫い止めた構造とされ、更に、表裏の側生地２１の間に中綿層（中綿２３）を挿んできつく縫製され、中綿層（中綿２３）の厚みを締め潰すように縫製されている。そのため、四隅１１における中綿２３の嵩高さを抑えてより効果的に省スペース化が実現されている。更に、きつく縫製されていることで高い強制力を付与されている。そのため、布団の四隅１１をより綺麗に櫓５の脚５５に沿ってカーブさせながら垂下される。

40

【００２８】

そして、５本の縫製ライン１７のうちの３本は、四隅１１を４つの弧状に略四等分する縫製ライン１７Ａである。この縫製ライン１７Ａは、櫓５から布団が垂下される方向を、天面５１の対角延長線上に外へ広がるように強制している。そのため、弧状に丸められた四隅１１を確実に床面６０に密着させて、布団の浮き上がりを防止している。

50

また、５本の縫製ライン１７のうちの残りの２本は、櫓５の天面５１をなす各辺を延長した方向の縫製ライン１７Ｂである。２本の縫製ライン１７Ｂのうちの一方は、天面５１をなす長辺に対して並行に配置され、他方は天面５１をなす短辺に対して並行に配置されている。そのため、櫓５から布団が垂下される方向を、天面５１を構成する辺に沿って外へ広がるように強制している。従って、四隅１１以外の部分もより確実に床面６０に密着させて、布団の浮き上がりを防止している。

【００２９】

[実施の形態２]

本実施の形態２のこたつ掛布団１（図７参照）は、実施の形態１の場合と同様に座卓で利用されるこたつ掛布団である。このこたつ掛布団１の四隅１１には、各々３本の縫製ライン１７が配されている。これらの３本の縫製ライン１７は、いずれも、弧状をなす縁部１１１から、櫓５の天面５１の角が当接される位置１５に向かって、その間の全長を縫製してなる縫製ライン１７である。また、各縫製ライン１７は、いずれもひと続きの１本の直線である。この縫製ライン１７を形成する縫糸は、ポリエステル製の縫糸である。

更に、縫製ライン１７は、縫糸がこたつ掛布団１の表裏の側生地２１を貫通して中綿２３を縫い止めた構造とされ、更に、表裏の側生地２１の間に中綿層（中綿２３）を挿んできつく縫製され、中綿層（中綿２３）の厚みを締め潰すように縫製されている。そのため、四隅１１における中綿２３の嵩高さを抑えてより効果的に省スペース化が実現されている。更に、きつく縫製されていることで高い強制力を付与されている。そのため、布団の四隅１１をより綺麗に櫓５の脚５５に沿ってカーブさせながら垂下される。

【００３０】

そして、３本の縫製ライン１７のうちの１本は、四隅１１を２つの弧状に略二等分する縫製ライン１７Ｄである。更に、３本の縫製ライン１７のうちの残りの２本は、櫓５の天面５１をなす各辺を延長した方向の縫製ライン１７Ｂである。２本の縫製ライン１７Ｂのうちの一方は、天面５１をなす長辺に対して並行に配置され、他方は天面５１をなす短辺に対して並行に配置されている。そのため、櫓５から布団が垂下される方向を、天面５１を構成する辺に沿って外へ広がるように強制している。従って、四隅１１以外の部分もより確実に床面６０に密着させて、布団の浮き上がりを防止している。

【００３１】

[実施の形態３]

本実施の形態３のこたつ掛布団１（図１０参照）は、ダイニングテーブル（椅子に座って使用される机）に利用されるこたつ掛布団である。実施の形態３のこたつ掛布団１（図１０参照）も、基本的に実施の形態１のこたつ掛布団１と共通であるが、平面形状が長方形であるとともに、四隅を構成する弧は長辺の長さの１／８の長さを半径としている点で異なっている。

この実施の形態３のこたつ掛布団１は、実施の形態１のこたつ掛布団１に比べ、周辺部１４が大きい。即ち、中央部１３の大きさに比べて周辺部１４の大きさが大きくされている。従って、天面５１からはみ出た布団の周辺部１４は、櫓から垂下されるとともに、実施の形態１のこたつ掛布団１の四隅１１と同様に、天面５１の対角延長線上に外へ広がるように強制できるほか、図１０の隅１１eに示すように、内側へ織り込むように強制することもできる。この場合にも、弧状に丸められた四隅１１を確実に床面６０に密着させて、布団の浮き上がりを防止することができる。

【００３２】

尚、本発明においては、上記の具体的な実施例に記載されたものに限られず、目的、用途に応じて本発明の範囲内で種々変更した実施例とすることができる。即ち、例えば、本発明のこたつ掛布団は、こたつの熱源を外した状態においても利用することができる。

【符号の説明】

【００３３】

１：こたつ掛布団、

１１：四隅、１１a～１１e：隅、

10

20

30

40

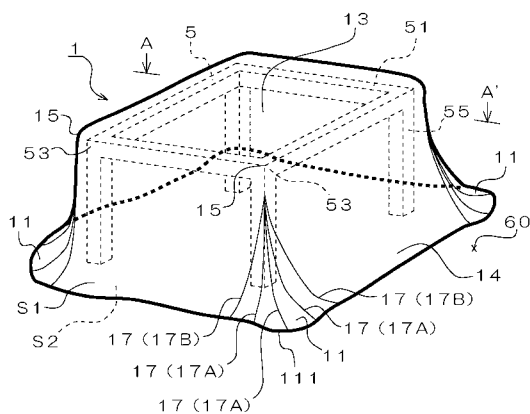
50

- 1 1 1 : 弧状をなす縁部、
 1 3 : 中央部（天面上に配置される部分）、
 1 4 : 周辺部（櫓から垂下される部分）、
 1 5 : 天面の角が当接される位置、
 1 7 : 縫製ライン、
 1 7 A : 略四等分弧状を形成する縫製ライン、
 1 7 B : 天面をなす辺を延長した方向の縫製ライン、
 1 7 C : 略三等分弧状を形成する縫製ライン、
 1 7 D : 略二等分弧状を形成する縫製ライン、
 1 9 : 他の縫製ライン、
 2 1 : 側生地、
 2 1 1 : 表側地、
 2 1 2 : 裏側地、
 2 3 : 中綿、
 5 : 櫓、
 5 1 : 天面、
 5 1 1、5 1 2、5 1 3 及び 5 1 4 : 天面を構成する辺、
 5 3 : 天面の角、
 5 5 : 櫓の脚、
 5 7 : 天板、
 6 0 : 床面、
 7 0 : 本体部、
 S 1 : 布団の表側、S 2 : 布団の裏側。

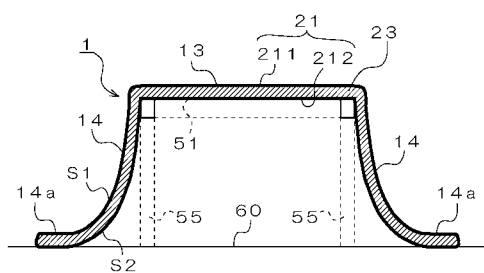
10

20

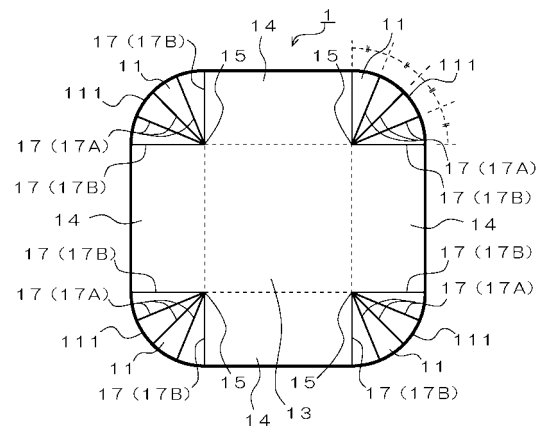
【図 1】



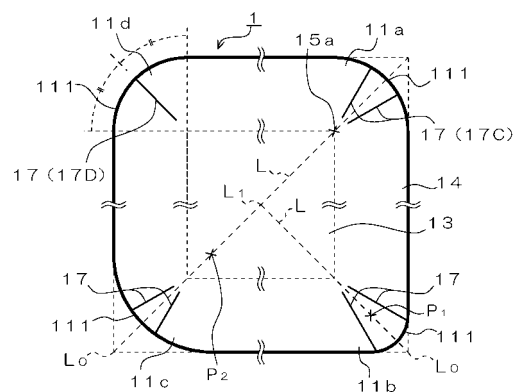
【図 2】



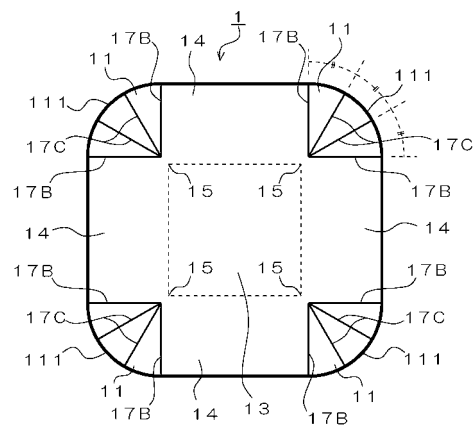
【図 3】



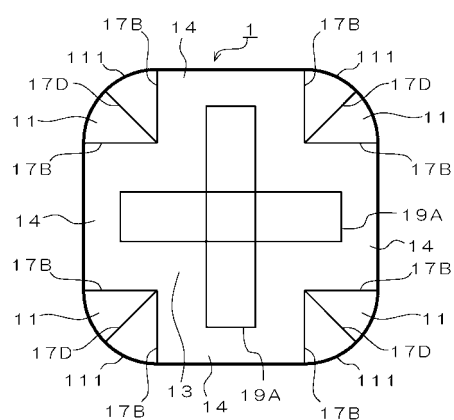
【図 4】



【圖 6】



【 図 8 】



【 図 9 】

